

だるまうつ
達磨移しの
ばかめんおど
馬鹿面踊り



登場人物

ナレーター

名人
めいじん

こくし様
こくしさま

子供
こども

村人1
むらびと

村人2
むらびと

村人たち
むらびと



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



「目久尻川」は、座間から流れでていて、初めは「小池川」と呼ばれていますが、海老名に入ると「目久尻川」と名前を変えます。

「目久尻川」の名前の由来については、いろいろ説があります。

ひとつには、いたずらをする河童に手をやいた人々が、河童を退治した時に、河童の大きな目を刃物でくじり取ってしまったということから、この名が生まれたと言われています。

またひとつには、以前の「目久尻川」の流れには、曲がりくねった場所が多かったそうです。そのため、大水の時など水の勢いがものすごく、出っばっている川岸の土をえぐり取って流してしまいました。

その流れは、目にあまるほど川岸を削り取るので、その名がついたとも言われています。

さて、この目久尻川が流れている上今泉あたりのお話です。

今では絶えてしまいましたが、何代か前まで上今泉の地に「達磨移し」という踊りが伝えられていました。

この土地の人たちは、お祭りなどで集まって酒盛りをしたとき、最



名人

後に必ずみなでこの踊りを踊って楽しんでから、解散するのが常でした。
ひよつとこのお面をかぶって踊るこっけいな踊りは、普通「ひよつとこ踊り」といいますが、この土地では「馬鹿面踊り」と呼んでいました。

むかし上今泉にこの馬鹿面踊りの名人がいて、口ばやしで

「トコトンツクツ、トトツクトトツク、トンツクツ。テケテンツクツ、テケツクテケツク、テンツクツ」

と踊ると、周りの人たちは自然に体が動いて、口々に

村人1

「トトツクトトツク、トンツクツ」

村人2

「トコトントコトン、トントコトン」

村人全員

「テケツクテケツク、テンツクツ」

と踊りだし、この名人が踊りを止めるまでは、自分から踊りを止めることができませんでした。

そのころ、となり村にこくし様というへそ曲がりの老人がいました。



こくし様

こくし様は、

「他人の踊りにつられて踊りだすのは最低じゃ。馬鹿面踊りなどに心を奪われて一緒に最後まで踊り続けるとは、正気の沙汰ではないわい」

と、あざ笑っていました。

上今泉の人たちは、悪口を言われたので腹を立て、

「こくし様は、馬鹿面踊りの楽しさを知らんのじゃ！」

「一緒に踊ってみれば、楽しさもわかるというものじゃ！」

「そうじゃ！この秋の風祭りに、こくし様に来ていただくようじゃな

いか！」

「そうじゃ、そうじゃ、それがええ！」

村の人たちは口々に言い、さつそく招待することにしました。

風祭りに招待されたこくし様は、

「ささ、どうぞこちらへ、こちらへ」

と名主様に案内され、名主様の家の床柱を背に貫禄を示してどつき座っています。



名主様

村人 1・2

名主様

村人 2

村人 1



名人

やがて、宴えんもたけなわになり、いつものように名人が口拍子くちびょうしに合あわせて、手振りてぶ身振りみぶ面白おもしろく、踊りだしました。

「トコトンツクツ、トトツクトトツク、トンツクツ」

しかし、こくし様は知らん顔かおをきめこみ、見向きみむもしませんでした。が、周りの人たちは、名人の口拍子くちびょうしに合わせていつの間にか踊りだしていました。

村人全員

「トコトンツクツ、トトツクトトツク、トンツクツ。テケテンツクツ、テケツクテケツク、テンツクツ」

こくし様は、達磨だるまのように身動きみうごきひとつしないで座っていましたが、しばらくすると、少しずつ肩かたを上下うごに動かうごかしはじめました。

そのうち、両手をひぎの上に置いたまま体からだをよじり、腰こしをゆすり、踊りに合わせて激はげしく動き出しました。

前に後ろすわに、上へ下への激はげしい動きのせいで、こくし様の体は座布団ざぶとんに座すわったまま移動いどうし始めはじめました。

名人と一緒に踊りに熱中ねっちゅうしていた人たちは、その様子ようすに誰だれも気がつきませんでした。



名主様

村人2

村人1

子供

やがて、みんなが踊り終えた時には、上座に座っていたはずのこくし様は、座布団ごと一番下座に移っていました。

「こくし様は、踊っておられたのか？」

「達磨みたいに座ったまんまで、動かれたんじゃねえか？」

「立って踊ってるのは、見てねえ」

「達磨みたい！達磨みたい！」

手足が動こうとするのを歯を食いしばってがまんをし、達磨のように座布団に座ったままで、部屋の中を移動してしまったことから、この踊りはその後、みんなから「達磨移し」と呼ばれるようになった。

そして、近くの村々ではたいそう評判になって、遠くの村からもわざわざこの踊りを習いに来る人もいた、ということです。